

体操競技（女子）の部活動とジュニアクラブの連携

埼玉県立戸田翔陽高等学校

山 口 裕

1 はじめに

体操競技（女子）は選手として活躍する時期が早い。オリンピック・世界選手権選考でも年齢制限で引がかかって出られない選手もいる。またそれに加え、技の高難度化などによって高校の部活動だけで上位の選手になれることはまずないだろう。そこで幼少期からの指導のために、ジュニアクラブが不可欠になってくる。

今回、私は体操競技（女子）の活動の形態に興味を持った。学校の部活動だが、外部で活動していたり、インターハイなどに行くと監督は教員でなく、ジュニアクラブのコーチが指導していたり、競技場にはジュニアクラブのコーチばかりだ。本校も学校で部活動を行わず、ジュニアクラブで行っている。私自身、勤務終了後、クラブに行きコーチとして指導している。

そのような中で、部活動とジュニアクラブの連携の方法にもたくさんあることが分かった。どのような連携方法をしているのか興味が沸いた。今回、部活動とジュニアクラブの連携に焦点を当てて研究していきたい。

2 本県の体操競技の実態

埼玉県は、体操王国ともよばれる程の体操競技の盛んな県である。県内予選が非常に厳しく、インターハイ等に出られる選手も少数だ。県内予選のない「全日本ジュニア体操競技選手権大会」などに出場すると、上位入賞してしまう選手も多い。私の所属している県立戸田翔陽高校も、去年はインターハイ団体総合優勝だったが、今年度は関東大会で団体優勝できたものの、インターハイ予選では県立ふじみ野高校・埼玉栄高校に敗れ、インターハイに団体出場すらすることができなかった。県立ふじみ野高校は、今年度のインターハイで団体3位入賞を果たしている。

以下は、埼玉県体操協会加盟団体数と施設についてである。

○高校体育連盟加盟団体 体操競技女子 21 団体（高校総数 201 校）

専用体育館がある学校はごく僅かで（公立高校では1校）である。多くの学校が器具の出し入れを行い、他の部活動との兼用体育館である。

※ここでの専用体育館は、体育館全面に器具が常時セッティングされていること。半面だけの体操場は含んでいない。半面は数校あった。

○埼玉県体操協会加盟ジュニアクラブ 26 団体

専用体育館を持っているクラブは少数である。倉庫を改築して体操場を建てるなど、各クラブ苦労しているようである。多くのクラブは場所を借りて経営をしている。その中には、①場所だけ借りて器具を出し入れして運営しているクラブ。②高等学校の専用体育館を、学校開放の一部として利用しているクラブがある。

3 研究方法

- ① 体操競技部の生徒のジュニアクラブとの関わり方のパターン化及び特徴の分析。
- ② 昨年度の埼玉県の試合（女子体操競技）の結果を集約し、①と適合させる。
- ③ 勤務校の実態について分析する。

4 選手のジュニアクラブへの関わり方のパターン

表 1

パターン	①活動場所	②指導者	③選手
I	校内	教員	部活動
II	校内	教員	ジュニアクラブ兼
III	校内	ジュニアクラブ	部活動
IV	校内	ジュニアクラブ	ジュニアクラブ兼
V	校外	教員	部活動
VI	校外	教員	ジュニアクラブ兼
VII	校外	ジュニアクラブ	部活動
VIII	校外	ジュニアクラブ	ジュニアクラブ兼

表 2

I (校内・部活動型)		IV (校内・ジュニアクラブ型)		VIII (校外・ジュニアクラブ型)	
長所	短所	長所	短所	長所	短所
○高校では環境をかえて気分一転して行える。 ○普段の高校内での日常生活から顧問が指導できる。	○中学時代の指導の継続性がなくなってしまう場合もある(指導者側の要因)。 ○入試勉強などで競技を一旦中断してしまうことが多い。	○幼少期から高校卒業までで一貫した指導ができる。 ○活動場所が校内なので異動に時間が掛からない。	○学校開放なので入試の時期など使えないなど。 ○I や複数のクラブから成り立っている部だと高体連の試合に参加する時の団体選手の選考など難しい。	○幼少期から高校卒業まで一貫した指導ができる。	○練習場所が学校と離れている場合は、時間がロスする。 ○高校に競技出身の顧問がいない場合がある。 ○I や複数のクラブから成り立っている部だと高体連の試合に参加する時の団体選手の選考など難しい。 ○幼少期からずっと同じ環境であるため、大学進学して環境が変わりついていけない選手もいる。

(1) 今回体操競技(女子)部に入部している選手の活動形態をパターン化するために、

①活動場所が学校の体育館なのか、校外の施設で活動しているのか。

②選手を指導している者は「主として学校の教員が指導しているのか(教員)」「クラブのコーチが主にやっているのか(ジュニアクラブ)」

③選手は「部活動のみとして活動しているのか(部活動)」「ジュニアクラブを続けながら部活動として行

っているのか(ジュニアクラブ兼)」の三点に絞って調査してみた。結果として8パターン考えられた。

しかし、後述の「(2) 特徴」のように、現状としてⅠ(校内・部活動型)、Ⅳ(校内Ⅳ(校内・ジュニアクラブ型)、Ⅷ(校外・ジュニアクラブ型)が多いので、今回はこの3パターンを取り上げる。

なお、高校体操界では「インターハイ」「高校選抜」「全日本ジュニア」(敬称)などの試合に出場・入賞が、上位の選手の目標となってくる。「全日本ジュニア」は全日本ジュニア体操クラブ連盟に登録しなくてはならない。高校の部活動で行っている生徒でも「〇〇高校クラブ」などの名前でジュニアクラブ登録するので、Ⅵのパターンも考えられるが、今回は省いた。

(2) 特徴

Ⅰ いわゆる普通の部活動の生徒。高校になって競技を始める生徒、中学時代から継続して行う生徒、などがある。

Ⅱ ジュニアクラブに入りながら学校の部活動で、その学校の顧問に指導されている。中高一貫校などで教員がクラブを立ち上げた場合など考えられるが、今回はⅣに含むこととする。

Ⅲ 部活動のみでジュニアクラブのコーチに指導される。外部コーチなどが考えられるが、今回はⅠに含むこととする。今後、学校の指導者不足などが深刻化すると増えるかもしれない。

Ⅳ 専用体育館のある学校などでジュニアクラブが活動している場合。その高校に入学し、その学校の部活動に入部し、継続してジュニアクラブからのコーチに指導を受ける。

Ⅴ 部活動のみで常に活動拠点が校外にあることは、埼玉県の実操界では稀であるため今回は除外。

Ⅵ 校外のジュニアクラブで教員が指導する。教員がジュニアクラブを立ち上げた場合考えられる。少数派のため今回はⅧに含むこととする。

Ⅶ このケースは聞いたことがない。

Ⅷ 専用体操場を持っているジュニアクラブの選手が、高校入学後も拠点をクラブのまま活動する。

(3) 長所・短所

表2は、各パターンそれぞれの長所と短所である。ⅣとⅧについては活動場所が校内か校外かの違いである。しかし、ⅣとⅧには違いがある。Ⅳ(校内ジュニアクラブ型)の高校には専門体操場がある。専用体操場を維持するための体操専門の教員がいる。しかもジュニアクラブに練習場所を提供している。しかし、Ⅷのような校外に拠点があるような場合は、高校に専門家がいないこともある。活動拠点も学校でないということで、部活動としての機能があまり果たせなくなってしまうことも懸念される。それは学校の教員が生徒に触れ合うことが少なくなってしまうからだ。

学習指導要領解説保健体育編体育編(第3章第3節)によると「生徒の自主的・自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」と示されている。

このような部活動の意義だが、Ⅷのパターンで活動場所も校外で顧問も専門外だと「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意」の点を満たすことが難しい場合も出てくると思われる。

5 埼玉県内試合結果

表 3

順位	関東二次予選会		インターハイ予選会		新人大会	
1	戸田翔陽高校 (外部体操場)	VIII	戸田翔陽高校 (外部体操場)	VIII	埼玉栄高校 (専用体操場有り)	I
2	大井高校 (専用体操場有り)	IV	大井高校 (専用体操場有り)	IV	戸田翔陽高校 (外部体操場)	VIII
3	埼玉栄高校 (専用体操場有り)	I	埼玉栄高校 (専用体操場有り)	I	大井高校 (専用体操場有り)	IV
4	聖望学園高校 (専用体操場有り)	IV	聖望学園高校 (専用体操場有り)	IV	伊奈学園 (専用体操場有り)	I
5	伊奈学園 (専用体操場有り)	I	伊奈学園 (専用体操場有り)	I	聖望学園高校 (専用体操場有り)	IV
6	浦和第一女子高校	I	大宮東高校 (専用体操場有り)	I	大宮東高校 (専用体操場有り)	I
7	大宮東高校 (専用体育館有り)	I	浦和第一女子高校	I	越谷東高校	I
8	越谷東高校	I	春日部東高校	I	市立川越高校 (専用体育館有り)	I

○表 3 は、平成 24 年度の埼玉県の高体連の体操女子団体戦(上位 8 校)の結果である。またローマ数字は表 1 のパターンを表す。もちろん複数のパターンが混在している学校が多いが、主となるパターンを示した。表 2 より下線部のことが分かる。

- ・上位校を見ると IV (校内・ジュニアクラブ型)、VIII (校外・ジュニアクラブ型) が多い。
- ・下位校にいくにつれて I 型が多くなってくることが分かる。

但し、I (校内・部活動型) でも表からは読み取ることができないが、実際には中学までジュニアクラブで強かった選手が高校に入学する場合がある。インタビュー調査の結果、上位校ではその例が多かった。

また、新人大会は団体の全国大会の予選会ではない。全国高校選抜大会の予選であるが、インターハイ等で参加資格を得てしまうと、1 軍のメンバーが参加しないことがある。この表の新人大会では、その年のインターハイ出場選手 6 名中 (3 年は 1 名)、1 名しか出場していない。

6 本校の実態 (埼玉県立戸田翔陽高校)

本校は上記の VIII (校外ジュニアクラブ型) の体操競技部である。戸田市スポーツセンター (戸田スポ) という強豪クラブが本校の隣にある。そのクラブに通っている選手が入学してくる。平成 25 年度の戸田翔陽高校体操競技部は 5 人である。内訳は 5 人全員が戸田スポの選手である。

戸田スポ内のコーチは 10 名程である。私も体操競技専門であるので高校の顧問であると同時に、クラブのスタッフとして選手を指導する。クラブでは、高校生だけでなく小中学生も指導する。むしろ小中学生が主である。数年前教えていた小学生が、やっと高校生となって入学してきた。利点としてはやはり一貫した指導ができることだろうか。また、クラブなので中学 3 年の大事な冬の時期に練習ができることだ。女子中学 3 年は体操競技にとって大切な 1 年間だからだ。コーチもたくさんいるので各コーチの良い所を吸収する

ことができる。

問題点としては、3点あげられる。

○幼児期から同じ場所なので、大学に入学して初めて環境が変わるため、適応できなくなってしまう選手も少なくない。Ⅳ（校内Ⅳ（校内・ジュニアクラブ型）は練習場所が高校体育館なので、多少は環境の変化がある。

○今現在、顧問がコーチの一員なので連携に苦労しないが、公立高校でしかも本校はパレットスクール（定時制）なので、次の顧問が体操競技専門と限らない。そうなった場合に連携というよりも事務連絡のみの関係になってしまうかも知れない。県外の強豪校ではそのような例もあると聞くが寂しい気もする。

○本校に戸田スポ以外のクラブの選手が入学すると、団体戦のメンバー選考など難しい。私自身戸田スポのコーチだからだ。そうすると半分は他のクラブに指導しにいったりしないと公平にできない。やはりそうすると、Ⅷ（校外ジュニアクラブ型）の顧問は指導せずに事務的なものだけの関与になってしまうのかも知れない。

7 おわりに

今回、調査してきた感想は「ジュニアクラブがないと体操選手は育たない。」である。その理由として、体操競技は系統的指導が必要であるからだ。時間も掛かる。高校3年間では選手は育たない。まして、女子選手は中高校生がもっとも活躍できる時期だ。

また、ジュニアクラブ側も高体連の大会を権威ある大会だと考えている。だからこそ監督変更などして、所属校の教員以外の監督だったりもするのだろう。その中で高校教員として考えることは「よりよい連携」をもっと考えていかなければならないということだ。それは専用体育館を持つ学校だったら、もっと外部に開放する（施設面での連携）、高校の顧問の指導力の充実（指導者として連携）を図ることだ。後者を実際見てみると、クラブのコーチが主になってしまっていて、顧問が実際指導していない学校もある。もっと研修に励み、指導にもっと関わるべきだ。そうすることで「ジュニア期からの一貫指導」に加え、「新しい風」を選手に吹き込み、様々な角度から指導ができる。

短所として挙がっていた「幼少期からずっと同じ環境であるため、大学進学して環境が変わりついていけない選手もいる。」の改善策にもなる。それと高等学校学習指導要領に示されている従来の部活動の役割を活性化できるのではないかと考えている。

よく部活動顧問は、「一国一城の主」と言われる。しかし、選手を強化し競技力を上げていくためには、選手との信頼関係を結び、もっと謙虚に指導者が研修を重ね、ジュニアクラブとの連携ができなければならぬと改めて感じた。私自身にも、常に言い聞かせながら、今後とも取り組んでいきたい。

参考文献・資料

平成25年度埼玉県体操協会要覧

学習指導要領保健体育編体育編（平成21年12月）

埼玉県体操協会

文部科学省